

城下で栄え伝わる 職人たちの技



緊張気味に女性の絵付けを見つめる有吉さん。絵柄は初代寺下幸司郎さん(池島さんの祖父)が昭和10年頃に生み出した当時からほとんど変わっていないという。

紀州雛

日本三大漆器のひとつで国の伝統的工芸品に指定されている紀州漆器。有吉さんが幼い頃から「お雛」と呼び、愛おんでいた紀州雛は、その技術を受け継ぐ気品と温もりに満ちた工芸品だ。お雛様に命を吹き込むのが3代目の絵付け師、池島史郎さん。「集中は必要だが、緊張すると上手く塗れない」と、下絵もないまま最初の一筆となる顔の肌色を入れる。1色塗っては乾燥させ、また次の色を塗る。その作業を何度も繰り返して完成するまでに2、3週間必要だという。木地師と塗師、絵付け師。緻密で手間のかかる工程に、それぞれの職人技が光っている。



the Creator's heart



紀州雛宗家寺下
住所/ 海南市船尾227
電話/ 073-482-3828



最後に目を入れる。集中力が指先から筆先へと伝わるが、躊躇はない。

漆器の町、黒江を散策。



うるわし館のすぐ近くの海南市黒江地区は紀州漆器の里として知られ、特徴ある街並は、商人たちが行き交う江戸時代の面影を色濃く残す。



漆器は紀州藩の保護を受けて黒江の町は栄え賑やかだったらしいですね



長年使い込んだ模様のように黒漆が見える根来塗は、鎌倉時代から隆盛を極めた根来寺の僧たちが日常使う器として発展した。その後豊臣秀吉の根来攻めで根来塗の工人たちは黒江や会津、輪島へと逃げ、そこで技術を広め日本三大漆器の礎になったといわれている。



江戸時代の貴重な紀州漆器や、人の大きさほどもある夫婦雛が展示されている「うるわし館」。紀州雛や日常使える漆器も販売している。
うるわし館(紀州漆器伝統産業会館)
住所/ 海南市船尾222 電話/ 073-482-0322



紀州てまり

「色鮮やかで綺麗ですね。紀州のお城でお姫様が優雅に転がし遊んでいたとか。万華鏡の世界にいるようです」と有吉さんが語る紀州てまり。紀州人の陽気さが伝わる鮮やかな色彩が特徴だ。芯材に下糸を巻き、一針ずつ丁寧に球に刺繍をしていき、気の遠くなるほどの手間ひまをかけようやく完成する。糸の色と模様を組み合わせて、無限の表情が創り出されるという。また、今秋開催の国体を機に、紀州てまりの魅力を全国に発信しようと、選手たちのために小さなてまりを手作りする輪が広がっている。



和歌山城にある紅葉深庭園を眺めながらお抹茶を頂く有吉さん。色鮮やかで手のこんだ柄の紀州てまりを今回は特別にごちやうと拝見。



紅松庵(茶室)
電話/ 073-431-8648



The guest

[有吉玉青さん]ARIYOSHI Tamao



「ルーツである和歌山を訪ねると元気になります」という有吉玉青さんは、作家としてエッセイや小説を数多く刊行。現在は大阪芸術大学教授も務める。母は去年没後30年を迎えた和歌山出身の作家、有吉佐和子。1990年、東大大学院在学中に母との思い出を綴った書き下ろし『身がわり』で第5回坪田譲治文学賞を受賞。



有吉玉青さんの最新作、2014年平凡社刊『ソボちゃん いちばん好きな人のこと』。母である佐和子さんと母を支え続けた祖母・秋津さん、そして玉青さんとながる女三代記。

発見！ 紀州の新しいモノ



和歌山のむぎのき方のみかし箱を購入しました！

和歌山城が見える旅カフェ和歌山(タイワロイネットホテル2F)にて



昔ながらの本染め(注染)や生地にもこだわった手ぬぐいは、インターネットや県内のお土産屋さんで購入可能。

紀州てぬぐい
<http://kisyutenugui.thebase.in>

紀州てぬぐい
東京から海南市に移り住んだ藤田貴子さんが考案したデザインが人気の「紀州てぬぐい」。梅やみかん、太刀魚、湯浅なすなど和歌山県の「いいもの」が並ぶ。「県外の人知らない和歌山の素敵なコトを、いっぱい知ってほしくて手ぬぐいにしてしまいました。これだとお土産としてかさ張らないし、和歌山をもっと知って、好きになってくれるかな」と新鮮な感性で生まれた紀州モノに注目だ。